

転移と隠喩に関する一考察

渡邊 潔

1. はじめに

心理療法という一対一の対話の場は、その対話が進むにつれて濃密にして奇妙な疎外感を感じさせるものへと変容する。なめらかに進んでいた連想が、とつぜん宛先を見失ったかのように停滞し、場違いな印象を与える想起や曰く言い難い感情の蠢きが生じる。対話の場にもう一つ別の対話の場が重ねられたようにして、語り手も聞き手も自らの位置を一時見失い、やがて配役を宛てられた劇のようにして今までとは別の舞台が出現している。こうした状況は転移という概念の元に考察されてきた。そして転移の空間においてこそ、治療上重要な何かが為される。それは意味ある空間が突然無意味へと変質し、そこから新たに意味が産み出される過程だと言えるだろう。

隠喩もまた、無意味から意味を産み出すものである。詩的作品に限らず日常の会話の場面においても、なにか表現がとてつもない困難なときに、ぼろっと隠喩が産まれることがある。人の言葉はいつでも意味を失いうる不完全なものだが、ここには言い難いものを表現するために無意味に訴えるという言葉の奇妙な性質がある。

本論では転移の考察のために隠喩の考察を行う。心理療法という領野において転移と隠喩を考察する意義は、精神病に関して陰画のように浮かび上がる。ラカンが「無意識は言語のように構造化されている」と宣言し、ヤコブソン、そして何よりフロイトの読解を通じて、隠喩と換喩を言語の根本的な二側面として取り上げて以来、レトリックは単に言葉の文彩から、無意識の考察を可能にする重要な道具へと変わった。フロイトが転移神経症という言葉で、転移を生じさせることのできる神経症（転移神経症）と精神病（自己愛神経症）とを区別したように、転移はどんな病態においても同様に起こるものではない。精神病患者に転移と呼べるものが無いわけではないが、それは神経症者の転移とは区別して考えなければならない。新宮（1989）¹⁷⁾はそれを「虚像転移」という言葉で表した。これは転移が神経症と精神病の区別にとって密接に関連していることを意味している。そしてラカンが『精神病』のセミナー¹⁵⁾において、シュレーバーの『回想録』には隠喩と呼べるものが全く無いと述べ、父性隠喩が成立していないことが精神病患者を特徴付けるとするとき、転移と隠喩を立てて考察することへの意義が見出せるのである。

2. 転移と現前化

転移とはなにか。そしてそれはなぜ分析治療中に必然的に生じるのか。以下にフロイトのテ

クストを辿りつつ考察をしていく。『転移の力動論にむけて』(1912)⁶⁾においてフロイトは、転移という現象の下に横たわっているものとして「印刷原版 (Klischee)」という、それ自体は像ではないが像を生み出す原器の比喻を用いる。「どんな人間も、生まれつきの素質と子供時代に受けた影響との共同作業によって、自分固有の性愛生活の営み方を獲得する」のであるが、いうなれば今は亡き幼児期において、どのように愛の対象を見出し、喪失し、それを欲望するか、といったものが消し難く運命のように「印刷原版」に刻まれているのである。そして転移においては、クライアントは治療者に対してその印刷原版に基づいた像を見出すことになる。

それでは、転移が生じる地点はどのようなものか。連想が進み病源となるコンプレクスの探求を無意識の根源へと追跡していくと、抵抗がはっきりと自己主張している領域へと到達するが、「転移が登場するのはこの地点である」とフロイトは述べ、転移の抵抗としての性格を強調する。すなわち、非常に語り難い、ある意味では語りえない地点で生じるのが転移だと言えるだろう。フロイトは転移を最強の抵抗と位置づけつつも、そのような無意識の根源的地点における困難さや苦痛を理解し、『転移性恋愛についての見解』⁷⁾で「患者には、治癒へ向かう機制として転移性恋愛以外に何ひとつ打ち出すことができなかった」と述べている。そして、以下のように転移の現前化の機能を述べながら、転移を治療への積極的な機制として位置づけている。

「転移現象の克服が精神分析家に最大の困難を提示することは否みようもないが、とはいえ、まさにこの現象が病者の隠された、また忘れられた愛の蠢きを活性化し顕在化させるという、計り知れない任務を果たしてくれるのだということを忘れてはならない。なぜなら、結局のところ不在の者を打ち倒すことはできないし、本人の代わりにその肖像を打ち倒すというわけにもゆかないからである」[全 12, p.220]

転移における現前化の機能、これによって、「一連の過去の心的体験全体が、過ぎ去った体験としてではなく、医者という人物との現在進行中の関係として息を吹き返すのである」[全 6, p.152 傍点引用者]。幼児期はそのものとしてはもう無い。それは「印刷原版」のような痕跡としてあるばかりである。転移はこの「印刷原版」という、はるか昔に刻まれた痕跡のようなものから、その現前化の機能によって幼児期の幻想と関わることを可能にする。さて、それでは転移において生じた人物像があるとして、その人物像との関係が常に重要な要素を含んでいるといえるだろうか。転移が生じる領域における連想についてもフロイトは慎重であり、直ちにその抵抗の背後に特殊な病因的な意味があるとは結論できないと述べる。

「転移による抵抗のために選ばれた要素がいつでも病原として特に重要であると結論付けてはならない。(…)対象の価値は単に戦略上のものにすぎない可能性があるし、もしかしたら、この戦闘において妥当するだけのものなのかもしれない」[全 12, p.215]

このことは、治療者という人物像に関するものだけではなく、転移がおきている全体の状況

も含めて転移として考察することの必要性を言っている。そのことをクラインは明確に述べている。「転移の起源」(1952)¹⁰⁾においてクラインは、「転移は、最早期段階において対象関係を決定づけていたのと同じ過程の中で生まれる」と述べる。「転移の詳細を解明する場合に、過去から現在に転移されている全体状況について考察することは、情緒、防衛、対象関係について考察することと同様重要なことである。」[著 4, p.67, 70 傍点引用者]

すなわちクラインは、過去の全体状況が、今現在の治療状況に丸ごと転移されているとする。転移がすでに失われている幼児期の状況へとわれわれを引き寄せるのであるならば、この全体状況とは、物言わぬ幼児が囲まれている場、ラカンのいう大文字の他者の語らいの場だと言えるであろう。本論では、隠喩という言語的な機制との関連で転移を考察するものであるため、次にラカンの転移論を辿ろうと思う。しかしその前に、本論のもう一つの主題である隠喩についてアリストテレスとラカンの読解を通じて考察を加えよう。隠喩もまた、現前化の機能を持つのである。

3. 隠喩と現前化

まずはじめに、ここで問われる隠喩はリクール¹⁶⁾の言う「生きた隠喩」であり、慣用句化されて語彙となった「死んだ隠喩」ではない。つまり、隠喩がまさに生じる瞬間の、その力動性に関する考察をしていくことになる。

隠喩は修辞学という学問領域において扱われてきた。修辞学が学問領域として定着したのはギリシア・ローマ時代であったが、アリストテレスの『詩学』³⁾とともに『弁論術』²⁾においても隠喩について記述されていることからわかるように、レトリックは単なる文彩ではなく、人の心に訴え説得させる動的で魔的な学であった。法廷や公の集会などで民衆に影響を及ぼし我が意を通すこと、それは単に論争上の勝利ではなく、現実における勝利でもあった。言葉一つで命が動きうる、弁論術は言説が決定を下す戦いにおいて勝利をもたらすために要請される武器であり、言葉の危険な力を巧みに捉えようとする野性的な出自を持つ。

バルト⁴⁾が「修辞学全体がアリストテレス的なものではなかろうか」と述べるように、修辞学に関する体系はアリストテレスに端を発している。これからアリストテレスを引きつつ隠喩について考察していく。彼の記した隠喩の定義とは以下のようなものである。

「隠喩（転用語）とは、（あることを言いあらわすさい）本来別のことをあらわす語を転用することを言う。すなわち、(a) 類をあらわす語を、その類に属する種に転用すること、(b) 種をあらわす語を、類に転用すること、(c) 種をあらわす語を、別の種に転用すること、(d) 比例関係によって転用すること、のいずれかである」(『詩学』1457, b, 6-9)

そして四つ挙げられたタイプのうちの4番目 (d) を隠喩のうちで最も優れたものとし、以後の修辞学ではこのタイプのみが隠喩として扱われることになる。比例関係とは、A の B に対する関係が、C の D に対する関係に同じであるということから、論理的に構成される隠喩である。例えば、「アキレウス (A)」の「勇敢さ (B)」が、「獅子 (C)」の「勇敢さ (D)」と

類似しているとする、隠喩としては「獅子が突き進んだ」となる（この表現でアキレウスのことを言っているということは、無論その場の文脈によって補われるものである）。そしてこの場合、「アキレウスは獅子のごとく突き進んだ」というのが直喩にあたる。

アリストテレスにとって「すぐれた隠喩をつくることは、類似を見てとることである」（『詩学』1459, a, 8）。しかし同時にその類似性は、「一目でそれと判ることのないものによらなければならない」（『弁論術』1412a, 10-12）。すなわち隠喩には謎めいた要素が必要ということである。謎と隠喩の関係についてアリストテレスはこう述べる。「謎の本質は、事実を語りながら、結び合わせることでできないことがらを結び合わせることにあるが、このことは（…）隠喩の結び合わせによってはじめて可能になる」（『詩学』1458, a, 26-8）。

この謎は単に打ち捨てられる無意味ではなく、意味を誘う無意味である。隠喩において「獅子」と「突き進む」が出遭う。この無意味のなかに意味を見出そうという心が聞き手に生じ、やがて「アキレウス」と「獅子」の類似に至り、無意味から意味を掴みとる。それではこの地点、つまり隠喩において無意味から意味が生じる地点の様相はどのようなものだろうか。先述のたとえば「勇敢さ」という類似性を一例として出したが、もちろんこれが唯一の類似性ではない。いやむしろ、この類似性が同定されるとそれはもはや直喩であり、隠喩の謎めいた表現力はなくなってしまうだろう。ここでアリストテレスにとって「類似」という語はどのようなものかをみる必要がある。アリストテレスにおいて「類似」とは、同一の中に差異を見ることである（『形而上学』¹⁾、第5巻、9章、1018 a 15-18）。「アキレウス」と「獅子」との間に類似性があるとは、その同一性がありつつも差異を内に含み続けるということである。リクルの述べるように、「獅子が突き進む」という言表において、「字義通りの矛盾が差異を保っているゆえに、隠喩は類似の作業を示す」[『生きた隠喩』、p.246]のである。

このことは、ある隠喩において無意味から意味を把握するとき、その意味はその隠喩と等価な他の表現に定まることは無いということの意味している。このような隠喩の動的な作用を考える上で、アリストテレスが述べている極めて印象的な考察をとりあげよう。それは隠喩における像の現前化といえる機能である。

アリストテレスにおいてすぐれた隠喩とは、「述べられている事柄を眼前彷彿とさせるようなもの」であり、聞き手が「当の事柄を、将来のこととしてではなく、現に行われているもののように見る」ものである（『弁論術』1410, b, 33 傍点引用者）。

つまり隠喩における、無意味のなかからの意味を把握とは、現前化された像において捉えるという仕方になされる。これが隠喩という言語的契機において生じた現象であることに注意しなければならない。すなわち、隠喩に際して像の現前化が生じることは、無意味という言語自身の限界地点に達した語る主体が、あくまでそれを言語的に捉えようとしてなされる、言語的な機能なのである。

また、それが無意味を捉えようとするものである以上、その像も明確な一つの像というわけではない。「獅子が突き進んだ」という隠喩を理解しようとするとき、そこには具象的な像はなく、むしろ不定にゆらぎ続ける曖昧な像があるだろう。隠喩における意味の把握とは、無意味さという性質を保ちつつ現前するような像を媒介にして、意味をつなぎとめるようなものである。

またアリストテレスは、「眼前彷彿」とさせることは、「表現を、事柄が生き生きと活動している形で再現する」、「無生物を生あるもののように」見せるものであるという（『弁論術』1411, b25-1412, a3）。ここには、隠喩における生き生きとしたイメージの下には、それを支えるようにして、無意味な、語られることのできない、無生物的なものがある、ということが示唆される。

ここまでアリストテレスを辿りつつ、隠喩の考察を行ってきた。言うまでもないが、詩や弁論術ばかりが隠喩の舞台ではない。日々話す人間である我々も、しばしば生きた隠喩をその口から生み出している。つまり、隠喩を生み出す機制はそもそも言語に備わっているものなのである。ここで隠喩の出自について、リクルの興味深い言葉を拾っておこう。「隠喩的過程では、類への動きは差異の抵抗で止められ、修辞学の文彩でもって、いわば遮られる」[p.249]。ここでリクルが言わんとしていることは、例えば「男は狼」という隠喩において、文字通り「男」が「狼」として受け止められずに遮られ、この言表は隠喩として受け止められるということである。つまり、言語にはそもそも、創造的かつ破壊的な、境界侵犯的な機制が内包されているということである。その境界侵犯的な性質のために既存の言語体系との抵抗に出会い、その結果として隠喩が生まれる、という非常に興味深い隠喩の出自に対する示唆がここから得られる。

以上述べられたことをまとめてみよう。隠喩とは言葉が話されるなかで、言語自体に内在する境界侵犯的な機制であったり無意味への志向性によって生じるものである。そして隠喩表現における意味とは、他の表現に言い換えられるものではなく、その隠喩表現の字義通りの謎めいた無意味さを保ちつつあるような、動き続ける像の現前を媒介にして獲得されるものである。そしてその無意味な表現から生じた動き続ける像は、その下に支えのようなものとして、語ることのできない無意味なもの、無生物的なものを抱えている。

このように述べてくると、フロイトの転移論において述べてきた、語りえぬ地点に達した際に、印刷原版を土台に転移としての像や全体状況の現前化が起きる、という議論と響きあうものが感じ取れるだろう。しかし、それを早急に進めてしまうよりも前に、ラカンが隠喩について語ったことを辿っておこう。ラカンはなによりフロイトへ常に結びつくように語っているのであるし、ここでアリストテレスの隠喩から考察したことが、ラカンの隠喩論とも響きあうと思われるからである。

4. ラカンの隠喩論

ラカンは「主体の隠喩」(1960)¹³⁾において「もっとも厳粛な現実とは、隠喩による以外は、とどめおかれることができない」[É, p.892]と述べている。これは何を言おうとしているのか。ラカンはまず隠喩をシニフィアンの機制として捉える。ラカンの隠喩論はヤコブソンの言語学から示唆を受けているが、まずヤコブソンを辿り、それからラカンの隠喩論について述べることにする。

ヤコブソンは「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」⁸⁾において、失語症の言語機能の損なわれ方には、選択能力の障害（連合機能がこわれる）と、結合能力の障害（連辞機能がこわれる）という二つのタイプがあることを発見した。ヤコブソンの卓見は、そこからソシユ-

ルの取り出した連辞（結合）と連合（選択）という言葉の二つの性質を、換喩と隠喩というレトリックの二つのタイプに関連付けたことである。すなわち、選択を類似性に基づくものとして隠喩に、結合を隣接性に基づくものとして換喩に対応させたのである。これ以後、レトリックの主な二原理である隠喩と換喩は単なる修辞技法にとどまらず、人間の言語活動そのものの二原理へと拡張され、さらには文学や絵画などの位置付けに関しても適用されるようになった。

このようなヤコブソンの成果を踏まえてラカンの隠喩論は展開される。「無意識における文字の審級」(1957)¹²⁾のなかでラカンが隠喩を語るときに取り上げる例は、ユゴーの詩句、『眠れるボアズ』からの次のような一節である。

「彼の麦束は、欲深くなく、恨み深くも無く」

ラカンは、隠喩の効果とは顕在的な二つのシニフィアンに生じるものではなく、顕在的なシニフィアンと潜在的なシニフィアンの間に生じるものだとし、以下のように述べている。隠喩とは「二個のシニフィアンの間にほとぼしり、ひとつのシニフィアンは、もう一つのそれに代わって、シニフィアンの連鎖の中にその位置を占めるのです。この場合、隠されたシニフィアンは、連鎖のうちにあるその他のシニフィアンとの（換喩的な）結合関係によってそこにあり続けるのです。一語に代わるほかの一語。これが隠喩の公式です」[É, p.507]。それは以下のような式をなす。

$$f\left(-\frac{S'}{S}\right)S \equiv S(+)S$$

この式において、左辺はもとのシニフィアン S (ボアズ) の位置に S' (麦束) が代入され、S (ボアズ) がシニフィエの位置に落ちたことを示している。右辺の (+) はシニフィアンとシニフィエを分かち線を飛び越え、新たな意味作用を生み出したことを示す。つまり無意味からの新たな意味の創造である。ラカンはこう語る、「隠喩は、意味が無意味のなかから生じるまさしくその場所において、自己を位置付ける」[É, p.508]。

「ボアズ」は「麦束」によってシニフィエの列に落ちつつも、その場に留まり続け、そこからシニフィアンの換喩的連鎖を続けていく。「ボアズ」は決して元の（「麦束」のある）位置に戻ることはないが、消えてしまうのではない。落とされたまま保持され、その効力を及ぼし続けるのである。

ここでラカンは同時に父性隠喩（父の名の隠喩）に言及する。いわゆる「父」の機能は、現実の父ではなく、隠喩としての「父」の機能である。この例で下に落ちた「ボアズ」のように、いわば死んだ父として、それでも生きた効力を及ぼし続けること。それを可能にするのは隠喩の機能である。そのため、隠喩の機能がなく、父性隠喩が成立していない精神病患者には、父の機能が内在化されていないのである。

さて、それでは隠喩の意味作用、すなわち落とされた「ボアズ」が及ぼし続ける効力とはどのようなものだろうか。ラカンはそれを決して到達できないものとして語る。隠喩の意味作用は、「意味作用の世界の新種、すなわち、異議異論が捉えることのできないひとつの偽性の種、そこから汲み取ろうとするいかなる瓶もそこへと沈んでゆくような、想像界の無限の測深しがたさ、波、深みである」[É, p.891]。

立木 (2007)¹⁹⁾はこの箇所の引用に続いてこう述べる。「転移において分析家との関係が性愛

化されるやいらないや、この（隠喩の）signification を、より正確には、この（隠喩の）signification を担うなんらかの——たいていの場合ファリックな——シニフィアンを頻繁に出現させる。ラカンはそれを偽とみなす。」[p.69 括弧内は引用者補足]。そして立木は、この「偽としてのファルス的 signification の彼岸に」対象 a がやってくるという。これはつまりどういうことか。

ラカンが言わんとしていることは、隠喩における意味作用は、想像界の無限の深みのようなものによって支えられるということである。それでは底なしの深みを持つその地点によって、それはどのようにして支えられるのだろうか。ここで先に考察したアリストテレスの隠喩の機能を思い出そう。隠喩においては、字義通りの矛盾さ・無意味さを維持しつつ、動き続ける像の現前化による媒介によって意味の把握がなされるのであった。そしてさらにその下にはそのような動き続ける像を支えるものとして無生物めいたものがあるのであった。以上を踏まえると、ラカンにおける隠喩の意味作用はこのように考えられるだろう。隠喩においては、動き続ける像（想像界の波）を媒介にして意味が生じるのだが、それは必然的に無意味（偽）である隠喩的な表現において支えられるのであるから、隠喩の意味作用について示すいかなる言述も偽なのである。そしてこのような、無意味にこそ基づいた像の向こうに、ラカンのいう対象 a がやってくる。

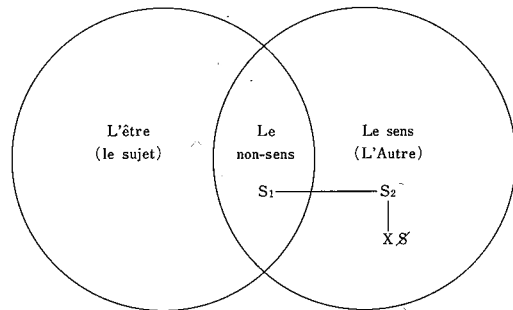
以上の引用は、隠喩が生じる地点と転移が生じる地点の作用が、同じ機制のもとにあることを示唆する。そしてアリストテレスとラカンの隠喩論から、隠喩において生じる像の彼岸に、それを支える無生物的なもの、対象 a が見出せるということは、これから見ていくラカンの転移論を隠喩の機能と平行して理解することを可能にするだろう。ラカンは「転移に関する私見」(1951)¹¹⁾において、「分析の対話が渋滞している時点において、患者がそれにしがたって対象を構成するような恒常的な様式が現れる」[É, p.255]と述べているが、この対象とはとりもなおさず対象 a のことだからである。そして本節の冒頭で挙げた、「もっとも厳粛な現実、隠喩による以外は、とどめおかれることができない」というラカンの言葉は、主体の現実、対象 a との関わりにおいて、隠喩の力動性のなかでしか近づくことができないことを示唆しているように思われる。

5. ラカンの転移論、そして《他者》の欠如を主体の欠如の隠喩として捉えること

ここからは『精神分析の四基本概念』¹⁴⁾を辿りつつラカンの転移論について考察する。ラカンの有名なテーゼとして、「人の欲望は大文字の他者の欲望である」というものがある。この大文字の他者（以下《他者》）とは、具体的な他者（小文字の他者）ではなく、言語の領野そのものである。転移における《他者》の欲望を説明するものとして、ラカンはアンナ・O の例をあげる。アンナ・O はブロイアーとの治療の中で順調に症状を解消させていったが、治療終結に際して突然病的な興奮状態となりヒステリー性の陣痛に見舞われた。そしてそれ以後ブロイアーは恐ろしくなって治療から手を引いてしまった。このときフロイトはブロイアーに対して、それが転移現象であることを自らの経験を述べながら説明し、ブロイアーを安心させたという⁹⁾。ラカンは、「人の欲望は《他者》の欲望である」という彼のテーゼに従い、この想像

妊娠をプロイアーの欲望の現れであるとする。アンナ・O は子どもが欲しいという欲望を、プロイアーから受け取ったのである。このように、《他者》の欲望を自らの欲望とすることは以下のことを意味する。すなわち、転移とは治療者とクライアントとが共にそこへ巻き込まれている一つの現象であり、転移は治療者とクライアントの欲望の出会いと考えなければならないということである。

それではどうしてアンナ・O はプロイアーの中に自らの欲望を見出さなければならなかったのか。人間はなぜ、自ら欲望することができず《他者》の欲望を受け取るという形でしか欲望できないのか。それに答えるには、言葉を話す存在になるために必然的に支払わなければならない代償について述べなければならない。それはラカンのいう疎外の vel (～か～か) である。ラカンは、人間が言語の領野に参入するさいの根本的な疎外を、疎外の vel として右のように図示した¹⁸⁾。



左の円は「存在 (主体)」を表し、右の円は「意味 (《他者》)」、すなわち言語の領野を表す。重なる部分は、「無意味」である。私が存在を選ぶと、主体は消失し、無意味となる。私が意味を選んだとすると、言語を話す私は、無意味の部分によって切り抜かれた姿でしか存続できない。なお、ラカンのこの集合の図は、右側の円を選ばなければ左も失うために結局右を選ぶしかない。

話す主体は《他者》の領野においてしか生きる道はない。しかしその領野に主体が現れるとき、彼はその存在を失い、いわば一人の他者として生きざるを得ない。われわれは喪われた存在を欲望するが、もはや話す存在になったわれわれは、《他者》として、言語を介してそれを欲望しなければならない。これが人の欲望が《他者》の欲望であるという意味である。子どもが繰り返し「なんで? なんで?」という理由、起源を質問するとき、彼が行っているのは言葉の領野に対する完全性の検査であり、自分が喪ったものを回復させてくれるかもしれないという願いを込めた探索である。しかしながら彼の願いは虚しく、言語はこの質問責めに完璧に応えることはできない。つまり言語の領野は完全ではなく、《他者》には欠如がある。存在を喪うという負債を背負ってまで参入した言語の世界が、不完全なのである。

ここには二つの欠如がある。この私が抱え続ける存在欠如と、私たちが暮らすこの言語の世界の欠如である。そしてこの二つを重ねることにより、《他者》のように欲望する主体として世界で生きていくこと、それがラカンが「分離」と呼ぶ過程でなされることであり、それは同時に転移を説明するものである。以下に分離について述べていく。

分離はまず、《他者》の欠如に出会うことから始まる。子どもが《他者》(たとえば親) から向けられた言葉の中に欠如を見出すのは、親のディスクールが躓く点であり、子どもはそこから親の欲望している対象を捉える。そして《他者》の欠如と自らの欠如を同じであると見なし、《他者》の欲望の対象を自らの欲望の対象として追い求める。その対象は自らの欠如を満

たすものと見なされているからである。しかし、《他者》の欠如がわからない場合、すなわち《他者》がなにを欲望しているかわからない場合はどうだろうか。ラカンは、「対象の解らない親の欲望に対して子どもが差し出す最初の対象、それは、己自身の喪失です」[p.287]と述べる。上図の右円を渉猟しそれでも親の対象が見出せない場合に、子どもは上図の重なる部分、自らが無意味となる場所において親の対象を見出そうとしてしまうのである。これは臨床場において、拒食症や自殺企図などのかたちで表れる現象に潜んでいる機制である。そこでは、主体は自ら死に近づきその存在価値を激しく《他者》に問うている。

以上述べた子どもと親との関係は、治療関係においてはクライアントと治療者の関係といえるだろう。クライアントは自らの苦しみを解消させる術を治療者が知っているとして期待する。このことをラカンは、「知っているとして想定される主体があれば転移がある」という [p.313]。それは自分の本当に欲望しているもの、すなわち自分が根源的に欠如してしまっているものを、治療者は知っているとしてみなす事である。治療者を前にして連想をするということは、《他者》の領野を散策することである。連想が言い間違いや沈黙で語りえない地点に到達する時、すなわち《他者》の欠如に達する時、その地点に自らに重要な対象の在り処を嗅ぎ取り、自らの欠如を重ね合わせることによって、対象を分離し手に入れようとする。これがラカンのいう転移現象である。

つまり転移には、欲望の対象を分離する（或いは生み出す）という機能がある。欲望することができるということは、人の生において非常に重要なことである。この世の何ものも欲望できなくなっているような、精神病圏の鬱病者の世界は、死の世界といえるほどの苛酷であろう。主体の欠如と《他者》の欠如は実際は異なるものなので、《他者》を通して主体が見出す対象も結局は主体の欠如を埋めることはない。しかしそれでも、この二つの欠如を重ね、そこに欲望の対象を見出して行くということは、自らが失った存在とのつながりのようなものを維持することを可能にする。だからこの欲望の対象は、主体と《他者》、わたしと世界とを、蝶番のようにつなげているとも言えるだろう。このような特権的な対象を、ラカンは対象 a と呼んでいる。

対象 a とは「現実的なものの接近自体によって引き起こされる何らかの原始的な分離や自己切断から現れ出る特権的な対象」[pp.109-110]である。この「現実的なもの」というのは象徴界の彼岸、言語の秩序が解れた場所に見出される領野のことであり、先ほどの図では重なる部分に置かれる。対象 a とは主体が自らを構成するために（分離の契機によって）手放した器官としてのなにかであり、「第一に切り離せるものとして、第二に欠如となんらかの関係を持っているという点において」[p.136] 定義されるものであるとして、ラカンは、声、まなざし、乳房、固い糞便を代表的なものとしてあげている。例えば、乳房に吸い付く乳児にとって、自分と乳房は未だ分かたれたものではない。乳房が離れる体験は、あたかも自分の身体の一部が挽ぎ取られるようなものだろう。その切断と喪失の苦しみのなか、初めて私（話す主体）が構成され、それと同時に私では無いものとして欲望の対象も構成される。失った対象を求め叫び続け、やがて“マンマ”などと言葉を発して求め、言葉を通して欲望する主体が構成されることになるだろう。転移において問題となる対象とは、根元的にはこのように主体の構成に関わるような対象なのである。

なお、疎外の vel (～か～か) は数学記号における“V”であり、分離は“Λ”（主体の欠如“かつ”《他者》の欠如）として説明され、それは図における円の重なる菱形状の部分の下半分と上半分の経路を示す。そして疎外（V）と分離（Λ）を経て、菱形状の部分が分離され、その場所に対象aが現れるということを図示している。このような根源的な対象である対象aは、「私では無い」というものであるため、自我にとっては無意味な、嫌悪し遺棄すべきものとして立ち現れてくる。

さて、これまで隠喩と転移との間の関連性については主題として扱ってこなかった。ここからは隠喩に関する議論を通して転移の機制を考察していく。まず、先に引用したラカンの言葉を再び引くことにする。「もっとも厳粛な現実、隠喩による以外、とどめおかれることができない」。この現実と言語の彼方にあらわれるものであり、それは話す主体となった我々が失ってしまったものである。ラカンは、それをとどめおくことは隠喩の機制によってのみであるという。そしてこれを、先ほど行った転移の考察において、《他者》の欲望を介してしか欲望できないこと、そして《他者》と主体の欠如を重ね合わせることが主体の失った存在とのつながりを維持する、と述べてきたことをあわせると以下のように言うことができるだろう。すなわち、転移とは《他者》の欠如を主体の欠如の隠喩として捉えることである、と。このことにより、《他者》と主体の欠如の重ね合わせという、矛盾・錯覚に満ちた機制について、これまで行ってきたアリストテレスとラカンの隠喩論を通して考察することが可能となる。

隠喩における意味の把握とは、無意味さという性質を保ちつつ現前するような像を媒介にして、意味をつなぎとめるものであった。そして、その像はその下にある無生物的なものによって支えられているのであった。あるいはこうも言うことができるだろう、隠喩は言語的な機制であるが、それは言語の彼方に立ち現れる無生物的な主体の現実を、特異な像の機能によって言語につなぎとめる。そして失った存在への欲望の経路を保つのである。このことから、転移において立ち現れる、いわば隠喩的な像というものには、以上のような機能があるといえるであろう。続く節ではフロイトの「症例ドーラ」⁵⁾を取り上げ、転移のなかであらわれる隠喩的な像の機能とその周辺について具体的に見ていくこととする。

6. 「症例ドーラ」における転移と隠喩的な像

「症例ドーラ」にはフロイトによって綿密に分析された夢が二つ取められており、この症例報告の中心を為している。本節ではその二つの夢のうち第一の夢を取り上げつつ考察していく。フロイトとドーラとの治療は三ヶ月に満たない期間で中断しており、それについてフロイトは父親転移を引き受けなかったこと、ドーラのK夫人に対する同性愛的な（女性愛的）^{ギューネコフィール}愛情の蠢きを扱わなかったことを理由としてあげている。このK夫人の背後に母親を見ることは容易であろうが、フロイトはなぜか母親の問題をあまり扱っていない。子どもに関心を示さず住居や家具の清掃と維持に没頭する母親を、フロイトは「主婦精神病」と形容してどこか軽んじ距離を置いているようであるし、ドーラもまた母親を軽蔑している。しかし、夢では執拗に母親の欲望の謎が浮かび上がっているのである。

第一の夢

「ある家が火事になっています。父親は私のベッドの前に立っていて、わたしを起こしています。わたしは急いで服を着ます。母は自分の宝石箱を持ち出そうとぐずぐずしていますが、父はこう言います。「君の宝石箱のために僕や二人の子供たちが焼け焦げるような目には遭いたくない」と。わたしたちは下の階に急いで降ります。そして外へ出るとすぐに目が覚めるのです」[全 12, p.78]

この夢は目覚めから始まり目覚めで終わるという循環的な形式をもつ。そしてドーラがこの夢を三晩も繰り返して見たということは、この夢が夢見手を繰り返し立ち戻らせる謎を含んでいるからに他ならない。その謎は隠喩の考察で触れたような、意味を誘う無意味であり、夢のなかでそれは、炎のなか宝石箱にかまける謎めいた母親の姿である。父親はその母親を打ち捨ててドーラを連れ出す。転移の全体状況の中では、謎めいた母親の問題を治療関係で扱わないフロイトは夢のなかの父親の位置にあるだろう。それはドーラを焼死から救うのであるが、同時に彼女の無意識は、炎のなかの母と宝石箱という情景に、なにか自分にとって重要なものがあるかのように執拗に引き寄せられている。宝石箱は子宮の象徴であり、それは女性の体内の空ろ、自らが内に含む欠如ともいえるだろう。通常、女性における去勢コンプレックスの辿る道は、失ったペニスの代わりに、男性から子どもを受け取り欠如を満たすというものである。しかしドーラが素直にその道を辿ることはない。性的に不能な父親に母親は宝石類をせがみ受け取っていたが、夢のなかでその母親が父親と子どもに目もくれず炎のなか宝石箱と戯れている姿は、男性からペニス（子ども）を受け取るのではない形での、炎えるような女の悦びを示しているようである。それはドーラが二時間もの間、恍惚とその前で立ち尽くした絵画、処女受胎をするマドンナの姿と重なるだろう。ドーラにとってそのような女性像は、そこに到達すると自分が焼け死んで消滅してしまうような恐ろしさを含み、かつ強く惹き付けられるものである。

「箱」のテーマはこの症例報告に繰り返し出てくるものである。箱の中には何があるのか。宝石という、人を魅了する美しき無機物。フロイトはこの問題を扱ってはいないが、通りすがりのようにひとことだけ、「(箱のなかに) ドーラが自分自身を手に入れる」[p.124 括弧内は引用者補足]と記している。まさにこの箱の中には、ドーラにとっての対象 a、失われた自分の存在といえるものがあるだろう。それは、人が生を選ぶのであれば手放さなければならないものである。そして、それを手放さずに炎えていく母親の姿が、ドーラに強烈に刻まれている。

本論の考察によると、転移の全体状況の中で現れる、意味を同定されることを逃れるような謎めいた隠喩的な像が、自分自身が根源的に失った対象への欲望の経路を維持するのであった。フロイトとの間での転移関係のなかで析出された、この不可解な謎めいた母親の像が、ドーラに失われた対象への欲望の経路を維持しているのである。

7. 結 び

精神病者には通常の意味での転移が無く、また隠喩も無い。このように転移と隠喩との間に

は平行するような性質が観察されてはいたが、これまでその関連性について直接言及した考察はなかった。本考察では隠喩の機制と転移の機制の同質性を示すことで、語りえない地点にこそ現れる謎めいた隠喩的な像には、話す主体が根源的に失った対象への言語を介した経路、すなわち欲望の経路を維持する機能があることを示した。ラカン派精神分析理論においては、神経症、倒錯、精神病と大きく三つの疾病分類が存在するが、本考察の結果は、転移において隠喩的な像というものが機能しているかどうか、あるいはその隠喩的な像がどのような様相を持つかといった観点から、三つの疾病分類それぞれに対する考察の道を示すと思われる。

文 献

*引用箇所のÉの文字は、ラカンのÉcritsからの引用であることを示す。

- 1) アリストテレス(1959): 形而上学 出隆訳 岩波文庫
- 2) アリストテレス(1992): 弁論術 戸塚七郎訳 岩波文庫
- 3) アリストテレス(1997): 詩学 松本仁助訳 岩波文庫
- 4) Barthes,R.(1970): L'ancienne rhétorique. (沢崎浩平訳 1979 旧修辞学, みすず書房)
- 5) Freud,S.(1905): Bruchstück einer Hysterie-Analyse. G.W. V, 161-286. (渡邊俊之他訳 2009 あるヒステリー分析の断片, フロイト全集 6, 岩波書店, 3-161)
- 6) Freud,S.(1912): Zur Dynamik der Übertragung. G.W. VIII, 364-374. (須藤訓任訳 2009 転移の力動論にむけて, フロイト全集 12, 岩波書店, 209-220)
- 7) Freud,S.(1915): Bemerkungen über die Übertragungsliebe. G.W. X, 305-321. (道旻泰三訳 2010 転移性恋愛についての見解, フロイト全集 13, 岩波書店, 309-325)
- 8) Jakobson,R.(1953): (川本茂雄訳 1973 言語の二つの面と失語症の二つのタイプ, 一般言語学, みすず書房, 21-44)
- 9) Jones,E.(1953-8): The Life and Work of Sigmund Freud. (竹友安彦訳 1964 フロイトの生涯, 紀伊国屋書店)
- 10) Klein,M.(1952): The origins of transference. (館哲郎訳 1985 転移の起源, メラニー・クライン著作集 4, 誠信書房, 61-72)
- 11) Lacan,J.(1951/1966): Intervention sur le transfert. Écrits, Seuil, Paris. 215-226
- 12) Lacan,J.(1957/1966): L'instance de la lettre ou la raison depuis Freud. Écrits. 493-528
- 13) Lacan,J.(1960/1966): La métaphore du sujet. Écrits, 889-895
- 14) Lacan,J.(1964/1973): Le Séminaire, Livre X I, Les Quatre Concepts Fondamentaux de la Psychanalyse. Seuil, Paris. (小出浩之他訳 2000 精神分析の四基本概念, 岩波書店)
- 15) Lacan,J.(1955/1981): Le Séminaire, Livre III, Les psychoses. Seuil, Paris. (小出浩之他訳 1987 精神病 岩波書店)
- 16) Ricoeur,P.(1975): La métaphore vive. (久米博訳 1984, 生きた隠喩, 岩波現代選書)
- 17) 新宮一成(1989): 無意識の病理学, 弘文堂
- 18) 新宮一成(1989): ラカンと臨床問題, 弘文堂, p.5 より図のみ抜粋
- 19) 立木康介(2007): 精神分析と現実界, 人文書院

(臨床心理実践学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

A Study of Transference and Metaphor

WATANABE Kiyoshi

What is the relativity between the transference in psychoanalysis and the metaphor in rhetoric? The transference and the metaphor are closely related. Both produce the image, in the point that cannot be talked. Through the comprehension of Aristotle and Lacan's metaphor theories, the following is clarified. The metaphor is a process of causing the meaning from meaningless, by the "metaphorical image". And the metaphorical image keeps maintaining meaningless. And when this idea in this metaphorical image is applied to the metastasis, it becomes the following. A metaphorical image in the transference maintains the route of a language approach to the object that the subject lost primordially. And the image also maintain the route of the desire to "Object a" that Lacan says. Consideration from the viewpoint of the metaphorical image will enables the road of new research on the neurosis, perversion, and schizophrenia.